

第一章
白鷹の自然

はじめに

白川上流の飯豊町上屋地で、約三万年前の人達が使ったとみられる石器が発見された〔昭和四十二年秋〕。その当時置賜盆地は、湖水であつたという。

約一万年前に高島町日向洞窟に住んでいた人達が、最上川上流に溯った鮭をとって食べたその骨が見つかった。

この頃から約七千年の間、縄文人達は、各地に生活した痕跡と石器や土器を遺した。白鷹町にも小四王原・石那田・八幡台を始めとして、発見されただけでも七〇余の遺跡がある。この人達は最上川やその支流細流の魚をとり、山野に獲物を追い求めて暮した。

晴れた満月の夜、吾が子に母は月に兎のいることを歌って聞かせたのは遠い昔のことになりつつある。人類は月に飛んでいって、兎でなく月の石をとって帰ってきた。もうこれからの母は、月に兎のいることは歌うまい。

吾等の祖先は、この自然を相手に生き続け山川草木の総ては人間を温かく見つめ育んできた。これからの人々も、この自然の中に生き続ける。